

インフォーマルな越境が日常化する空間のメカニズム

タイ・マレーシア国境東部からの考察

高村 加珠恵

(東京外国語大学大学院博士後期課程)

Informal Everyday Border Crossings and the Mechanism of State Regulations A Study of the East Coast of the Thai-Malaysian Borderland

TAKAMURA, Kazue

Graduate School, Tokyo University of Foreign Studies

This study examines the daily relationship between the state and the local community on the East Coast of the Thai-Malaysian borderland. It seeks to understand why and how informal border crossings persist despite the ubiquity of the state apparatus, represented in the guise of immigration and customs officials, and border police. It looks especially at how informal flows are conducted and how states regulate such flows at the border. As a political boundary, the border provides a clear demarcating between two nations. However, for local people who transcend the political boundary in their everyday lives, the borderland is a more ambiguous territory, most appropriately conceptualized, I argue, as a living sphere.

The approach of this study is two-fold: it looks at the informal flows of humans and goods at the border. The study first clarifies the unwritten rules that regulate border crossings. These include the nature of one's legal status and the distinction that the state makes between daily border crossers and non-daily crossers, particularly allowing daily crossers to bypass formal procedures. The first half of this paper thus explains how these unwritten rules actually facilitate informal human flows at the border. The second half of this paper looks at the local economic activities in the borderland, particularly the nature of the daily informal flows of goods and the state's regulation of the border. By looking at a strictly controlled item, namely, Thai rice at the border, the paper explains the mechanism of the state's regulation allowing informal flows within—yet not beyond—the borderland. This mechanism is the key to understand the formation of the borderland as a living sphere. Thus, this

Keywords: The East Coast of Thai-Malaysian Borderland, Political boundary, Living sphere, Informal border crossings, State regulations

キーワード: タイ・マレーシア国境東部, 領域境界, 生活領域, インフォーマルな越境, 国境管理

study not only seeks to understand the border space mechanism as a living sphere but also seeks to elucidate the relationship between local people and states from the everyday and micro level perspective.

1. はじめに：ある国境空間の日常
2. 問題の所在：インフォーマルな日常的越境
 - 2-1. 東南アジアにおける領域境界
 - 2-2. タイ・マレーシア国境東部の位置づけ
- I. 人の日常的越境
 3. 誰が国境を越えるのか？：インフォーマルな人の日常的移動
 - 3-1. 生業目的：バンダクチル商店街
 - 3-2. 生業目的：バンダクチル市場
 - 3-3. 生業目的：行商
 - 3-4. 通学目的
 - 3-5. 買物目的
 4. 国境における人の移動の管理
 5. 越境通学者と法的地位
 - 5-1. バンダクチルにおける越境通学の子供たち
 - 5-2. 越境通学の条件と背景：啓育小学校のマレー学生の場合
- II. モノの日常的越境
 6. バンダクチルにおける経済活動：インフォーマルなモノの移動
 - 6-1. サンバン貿易
 - 6-2. パサー（市場）
 7. インフォーマルなモノの移動の管理：タイ米のフローから
 - 7-1. 国境警備隊の役割
 - 7-2. 国境空間を越えるタイ米の管理
 8. おわりに：インフォーマルな越境が日常化する空間のメカニズム

1. はじめに：ある国境空間の日常¹⁾

タイ・マレーシア国境東部の境界線であるゴロック川沿いには、「違法に国境を渡った場合、最高1万リングット²⁾の罰金、もしくは5年間の刑に処する」とマレー語、英

語、タイ語の三言語で表記された大きな赤い立て看板が置かれている。しかしながら午後の下校時刻ともなれば、学校帰りのカバンを背負った小学生たちがその看板の横を通りすぎ、川沿いで待ち構える6人乗りほどの小さなサンバンボートに乗り込む。彼らはマレーシア側のバンダクチル³⁾の小学校からタ

1) 本研究は、筆者の2003年1月から2005年1月までの間に行った合計13ヶ月のフィールド調査を基にしている。主な調査内容は、a. マレーシア側の国境の町であるバンダクチルおよび隣接する南タイ国境地域、クランタンの州都コタバルにおけるインタビューおよび参与観察、b. 移民局、税関、国境警察、タイ領事館など政府機関とのインタビュー、c. クアラルンプールにおける国立公文書館における英アドバイザー関連の行政史料、年次報告書の収集、である。現在執筆中の博士論文では、国境社会が経験する国民国家の影響のプロセスという問題意識に基づき、中国系住民の日常的越境活動、すなわち教育、経済、婚姻という視角から考察を行っている。本稿は、日常的越境活動の背景となる国境の「空間性」に焦点を当てた部分である。尚、実地調査に当たっては、2002年度および2003年度のCEO助成金（東京外国語大学）、ならびに2004年度科学研究費補助金、研究課題名「東南アジアにおける中国系住民の土着化・クレオール化についての人類学的研究」（研究代表者 三尾裕子）からの助成により可能となった。

2) 2004年現在 1マレーシアリングットは日本円で約30円。

3) 本研究の調査地であるバンダクチルとは仮名である。

イ側のゴロックの自宅へ帰宅するのである。粗末な木製の船着場から細長いボートに乗り込むと数分で向こう岸に到着する。ゴロック側の船着場では、フルーツなどの入ったビニール袋をいくつも抱えたムスリム女性たちが乗り込む。彼女たちは、ゴロックで仕入れたフルーツをバンダクテル側の市場で売なのだ。このような光景は、国境の川沿いのごく日常的に繰り返されており、こうしたサンパンボートの粗末な船着場は、国境の川沿いにはほぼ100メートル毎に設置されている。

ゴロック・バンダクテル国境沿いに住む人々にとって、国境を渡る手段は、橋を越えるか、川を渡るかの二種類に分けられる。しかしながら、川からの越境は、1973年の国境を結ぶ橋の完成によって、事実上「違法」となった。橋の両端に設けられたそれぞれの国家の移民局及び税関によって出入国が公的に管理されるようになったからである。川沿いの看板に記載されている「違法に国境を渡る」行為とは、船で川を渡ることであり、まさに看板の横を毎日通り過ぎる、この学校帰りの小学生や、市場へ向かう女性たちの行為である。そして最も重要なことは、こうしたインフォーマルな越境は、この国境ではごく日常の光景である。不思議なことに川沿いに配備されたマレーシアの国境警備隊（PGA）もまたこうした越境を特に管理しようとはしていない。タイ側においては、国境警備隊の姿すら見られない⁴⁾。一方、バイクや自動車でも橋を渡るという行為は、必ず移民局や税関のカウンターを通過しなければならない為、一見すると「合法」的な行為である。しかしな

がら実際には、多くが *Angkat Tangan*⁵⁾（手を挙げる）だけであり、越境の際に必要な旅券を提示するケースは非常に少ない。このように朝の国境の橋や川には、南タイからの市場帰りのバンダクテルの住民、バンダクテルの商店に働きにでかけるゴロックの住民、バンダクテルの学校へ通学するゴロックの子供たちといういつもの日常的越境者たちの姿があり、そこにはあたかも国境という領域境界は存在しない。

2. 問題の所在：インフォーマルな日常的越境

一般的に国境概念には二つのイメージ、つまり国家領土を形成する「境界線」としての国境、および中央に対して周縁化された空間、つまり「辺境」としての国境である。まず「境界線」としての国境については、地理学者のムアー (Muir 1975) が以下のように定義する。

隣接した領土の間の接点に位置することによって、国際な境界線は、主権の権威の限定性を定義し、政治的地域の部分的形を定義するという特別な意味を持つ。国境は国家の主権が地球の表面の間につきささる垂直の接点から生まれる。垂直の接点であるので、境界線には水平的広がりはない⁶⁾。

このように「境界線」としての国境には、「水平的広がり」はない。一方の中央に対する「辺境」に関しては、政治境界が辺境地域において画定されていく歴史的過程について19世

4) これは、2003年から2004年初頭までの状況であり、2004年1月以降、南タイ側におけるイスラム分離主義活動による爆破、殺傷行為が活発化すると、次第にタイ側においても国境を警備する軍の姿が見られるようになる。この現在の南タイ側の状況については最後のところで触れることにする。

5) この *Angkat Tangan* とは、ある種日常的な越境のシンボルとなっている。尚、ニューストレイツタイムスの記事によれば「タイに頻繁に入国するマレーシア人はしばしば出入国管理事務所を通過する際に、特に旅券を提示せず、手を挙げるだけであり、現地ではこのような越境は *angkat tangan* として知られている（中略）。こうした越境者はしばしば国境を越えて商売や家族を持っている。」（“Ugly” Malaysians at the Thai border” *New Straits Times*, June 4, 2002）。

6) Muir 1975: 119.

紀のサラワク王国の国境管理の事例から考察を行った石川（2000）は、「辺境（フロンティア）」とは境界性が「不明確なゾーン」であると定義する⁷⁾。この「辺境」としての国境イメージには「境界線」よりもむしろ「空間性」が付与される。本研究における国境社会とは、「水平的広がり」を持つ空間であるものの、「辺境」すなわち、中央に対置される不明確な緩衝地帯ではない。このような緩衝地帯には、明確な「境界性」が不在である。本研究で認識する国境社会はむしろ、一方で「境界性」が確保されながらも、同時に「水平的広がり」、空間性が形成されるような空間である。

本研究で扱うタイ・マレーシア国境東部、バンダクチル・ゴロック国境の最大の特徴は、国家の出入国の統計に含まれないインフォーマルな日常的越境者の存在である。上述したように川と橋が国境を越えるための越境地点となるわけであるが、そこで見られる日常的越境の大多数が非公式な越境である。そもそもここで認識する「インフォーマルな越境」とは、サンパンボートで川を渡ること、出入国管理事務所で公的な出入国手続きを経ずに通過することなど、移民局で定められた法的な越境行為を逸脱する行為である。しかしながら、こうした日常的越境者が法的に罰せられることはほとんどない。川沿いに配置された国境警備隊も、国境の橋に設けられた移民局や税関もこうした越境行為に対して、明らかに通常の法的措置を適用していないのである。本研究の関心はまさにインフォーマルな越境が日常化する国境空間にある。このような空間が成り立つ背景には、国境における国家権力の弱さにあるとは必ずしも言えない。タイ・マレーシア国境沿いに目をやれば、近代的な移民局、税関、国境警備隊という国境管理を行う国家装置がしっかりと存在する。ここで注目したいことは、こうした国境



(The Straits Times)

図1. タイ・マレーシア国境

に配備された国家装置とインフォーマルな越境者との日常的な関わりであり、なぜ国境における国家の存在にも関わらず、インフォーマルな越境が許されているのか、である。この国家とインフォーマルな越境者の日常的交渉の姿を考察する上で、国境の持つ「境界性」を否定することなく、いかに水平的な広がりを持つ「空間性」が維持されるのが重要な問題となる。

本稿では、タイ・マレーシア国境東部に見られるインフォーマルな人やモノの日常的越境について、マレーシア側の国境の町、バンダクチルの日常的越境の事例から考察を行う。まず第一部では人の越境に焦点を当てる。そもそも誰が日常的な越境者たちなのかを明らかにし、移民局による越境管理を整理する。その上でインフォーマルな人の日常的な越境について、国境における越境通学の事例から考察を行う。第二部においては、モノの越境に焦点を当てる。バンダクチルにおける経済活動を考察することで国境空間内におけるインフォーマルなモノの動きを把握する。特に輸入が規制されているタイ米の事例からいかに国境空間を越えるインフォーマルな越境が管理されるのかを考察する。そして人・

7) 石川 2000: 216-221。

モノの日常的越境の考察から、最終的にインフォーマルな越境が日常化する空間のメカニズムを明らかにする。

2-1. 東南アジアにおける領域境界

近代とは地球の至るところに国境線を半ば暴力的に画定していった時代であった⁸⁾。東南アジアという文脈において眺めてみれば、植民地主義という全く新しい政体システムによって、前近代における政体概念を位置付ける「中心」ではなく⁹⁾、「境界線」によって位置づけられる領域概念がもたらされ、その政治領域の地図化が行われていった。近代における地図化プロセスは、まさに国民国家の具現化プロセスであり、その中で国家領土を形づける国境が決定的な意味を持っていた。これは、近代タイの地図化プロセスという視角から考察した歴史家のトンチャイ (Thongchai 1994) の研究からも明らかである。トンチャイは、近代タイ形成におけるその地図化プロセスを丁寧に考察しているが、彼の強調する点はいかに外から近代的地図技術が移入されたのかということよりもむしろ、いかに近代タイがこの外から移入された地図技術を内面化し、そしていかに近代タイにおいて、タイの地理的身体 (geo-body)

がイメージされ、それが重要なタイナショナリズムの中核となっていたのかを議論している。本研究で考察するタイ・マレーシア国境は、イギリスとタイの間で取り交わされた英暹条約に基づき1909年に誕生した¹⁰⁾。トンチャイは近代タイの geo-body 形成における周縁小国の「植民地化」を指摘しているが、興味深いことにマレー北部4州 (クランタン、クダ、プルリス、トレンガヌ) は、近代タイの geo-body 形成のプロセスに組み込まれ、しかしながら1909年の英暹条約においてタイが「失った」領土であった¹¹⁾。このように国境形成は非常に人為的なプロセスであり、タイ・マレーシア国境誕生そのものが非常に恣意的なものであったことが分かる。

一般的に国境を研究対象とする場合、大きく二つの境界、つまり領域境界と民族境界が問題視される。特定の社会や集団をその主な研究対象としてきた人類学にとって、国境地域は必ずしも不慣れな空間ではない。特に東南アジアをフィールドとする人類学者にとって、国境地域は少数民族の集住する重要な調査地域であった。このような中で人類学の関心は主に民族境界にあったといえる。そのパイオニア的研究として、ビルマ高地におけるリーチ (Leach 1979) の研究が挙げられる。

8) 伊豫谷 2002: 71。

9) 前近代の東南アジアにおける政体が「中心」によって定義されたという議論に関しては、タンバリアによる「まんだら」や「銀河系政体」(Tambiah 1976) に代表される。尚、「まんだら」とは、中央 (manda) と付属する要素の (la) によって構成されており、支配者の力とその影響の輪を意味する (Kobkua 1988: 20-21)。

10) 1909年の英暹条約 (Anglo-Siamese treaty) によって、シャムと英領マラヤの境界線が画定されたわけであるが、この背景にはシャム政府から条件付治外法権の撤廃およびマラヤ連邦鉄道からの400万ポンドの借款という条件がイギリス側に提示され、マレー4州 (クランタン、クダ、プルリス、トレンガヌ) のイギリスへの「移譲」の交換条件とされた。この条約によって、マレー4州は、「マレー非連合州 (Unfederated Malay States)」として英領マラヤに組み込まれることになった。尚、国境画定に関する条約は実は二段階に分かれており、第一段階のイギリス政府とシャム政府との国境画定 (1909年英暹条約)、そして第二段階のイギリス政府とマレー4州それぞれとの取り決めに分かれる。クランタンに関しては1910年の英・クランタン協定が結ばれた (柿崎 2000: 142, Marks 1997: 98-99, Mohd. Kamaruzaman 1992)。

11) 北部マレー州は、従来バンコクを中心とする朝貢システムの下に置かれていたが、19世紀以降、クダおよびパッタにおける反シャム勢力の拡大に伴い、マレー州におけるシャムの直接的な軍事的影響力が強まる。しかしながらクランタンにおいて実際にシャムの直接的影響力が強まるのは、チュラロンコーン王による行政の近代化以降 (1880年代以降) のことであり、シャムの「植民地化」はクランタンという文脈で言うならば、非常に短い期間であったといえる (Kobkua 1982)。

リーチの主な貢献は、それまでの民族集団を位置づける中心的概念であった単一の文化的要素ではなく、その集団の社会的役割、つまり他の集団から区別される構造的機能に注目した点にある。リーチは高地ビルマにおいてカチン族とシャン族を区別する境界線は、その政治的影響力へのアクセスの仕方の違いにあることを明らかにした。このような社会集団としての民族集団に対する認識は、バルト (Barth 1969) の研究においても同様に指摘された。バルトは、従来の認識である「文化を共有する集団」というよりもむしろ、「組織集団」としての民族集団に着目し、いかに集団間の民族境界が維持されるのかというメカニズムについて考察している。バルトは自己認識が民族集団のメンバーシップを決定する重要な要素であること、複数の集団間の接触が民族境界を形成してきたこと、の二つを主に主張する。彼の議論の重要な点は、民族境界を本質的な自然なものとして認識するのではなく、むしろ構築され、人為的に維持される境界であると指摘していることにあり、この認識はその後の人類学において大きな影響を与えた¹²⁾。

国民国家が人々の日常の中で重要な意味を持つようになった 20 世紀後半においては、人類学者はますます国民国家との関わりから現地社会を語ることを迫られるようになった。最近の東南アジア大陸北部と中国雲南と

の国境地域における研究では、境界線を越えて居住する少数民族について国民国家の枠組みにおける関わり、つまりこうした少数民族が恣意的な国家による国民化および民族カテゴリー化によっていかに排除、包括されてきたのかについての考察が行われている¹³⁾。本稿では、このような国家と民族境界との関わりという問題というよりも、国境社会がいかに国家との日常的な交渉において形成されているのか、つまり国家と国境空間形成との関わりに関心を置いている。本研究のように国境地域における人やモノの日常的越境を考察した研究には、スルー海域における越境交易と国民国家との関わりを扱った床呂 (1999) および、メコン川沿いのタイ、ラオス、ビルマ、中国国境地帯を考察した人類学者のウォーカー (Walker 1999) の研究が挙げられる¹⁴⁾。メコン川沿いにおける交易活動を扱ったウォーカーは、いかに 1990 年代初頭に登場した経済的地域統合化の動きの中で、国境を越えた越境が加速される一方、同時に国家の管理が強化されるという皮肉な現実を、実際の国境地域における交通網、貿易ネットワークから詳しい考察を行っている。ウォーカーの研究の場合、広域的な国境地域における交易活動に焦点が当てられており、本研究のように生活領域としての特定の国境空間に焦点を当てる視座とは異なるものの、空間的なアプローチから日常的越境と国家と

12) Barth 1969: 9-15。尚、東南アジアにおける民族境界についての代表的な研究としては、ビルマ・タイ国境のカレン族を考察した Keyes らの研究 (1979) が挙げられる。

13) 代表的な研究として、近年の研究である中国とタイ、ラオス、ベトナム、ビルマとの境界線をフィールドとしたエバンスらの編集による *Where China Meets Southeast Asia* に見られる。人類学者や言語学者を中心に中国と東南アジアとの国境という共通の地理的文脈から、国境に生きる少数民族を中心に多角的なアプローチによる研究が行われている (Evans, Hutton and Kuah eds. 2000)。尚、国民国家がいかにエスニシティを形成してきたかに関しては、中越国境地域のヌン族の調査を行った伊藤 (2003) の研究が詳しい。またタイ北部のリス族の調査を行った綾部 (1998) は、少数民族がいかに領域境界を経験するのかを彼らの国境認識の変化から考察している。また、王 (2004) はタイ北部の山岳地帯の国境沿いに集住する「雲南人」の移動と定着に焦点を当てた研究を行っている。

14) このほかに、歴史学の視座から国境におけるインフォーマルな越境について考察を行ったものに関しては、石川による 19 世紀後半から 20 世紀前半のサラワク王国における国境管理の研究 (石川 2000)、および 19 世紀末から 20 世紀初頭の Dutch East Indies においていかに初期の国境管理が行われたのかについて考察を行った Tagliacozzo (2005) の研究が挙げられる。

の関わりを考察を試みるスタンスにおいては、最も近い位置にある。尚、歴史家のヴァン・シェンデル (Van Schendel 2005) は、従来の国境研究においていかに国家が国境を管理するかという点は明らかにされても、いかに国境社会が国家と関わるのかというローカルな視角は明らかにされてこなかったことを指摘しているが¹⁵⁾、この点は床呂やウォーカーの研究、もしくは、2003年12月にアジア・アフリカ言語文化研究所で行われた国際シンポジウム「領域のダイナミクス：東南アジアにおける国境地域の比較 (Dynamics of Border Society in Southeast Asia)」¹⁶⁾に見られるように、近年の人類学において国境社会における領域境界への関心の高まりがあるといえる。

尚、日常的なインフォーマルな越境行為そのものをどのように認識するのかという点に関しては、バングラデッシュ国境における密輸について考察を行ったヴァン・シェン

デルの研究が挙げられる。彼の研究においては、国境における密輸行為そのものは法的には非合法 (illegal) であっても、社会的にはその行為が受け入れられるような越境のあり方 (illicit) が存在することを明らかにし、従来の密輸行為に対する視角が、いかに法的概念のみによって単純化されてきたかを指摘している¹⁷⁾。ヴァン・シェンデルの言葉を借りれば、本研究はまさに法的に illegal な越境行為がなぜ国境空間内においては illicit でありえるのかについて、国境空間のメカニズムという視角から明らかにする研究であると言える。

2-2. タイ・マレーシア国境東部の位置づけ

タイ・マレーシア国境東部¹⁸⁾はクランタン (マレーシア)、ナラティワート (タイ) 共に、人口構成ではマレームスリム住民が大部分を占め、非ムスリムである中国系住民とタイ系住民は非常にマイノリティである¹⁹⁾。

15) Van Schendel 2005: 44.

16) この国際シンポジウムのテーマは「国境域の社会に注目することにより、国境、そして国家の持つ意味を問い直し、人間の社会生活と国家との相互作用について考えること」にあり、いかに人類学が領域境界を日常的な視座から考えるのかという点がさまざまな角度から議論された (宮崎 2004: 13-16)。

17) Van Schendel 2005.

18) マレーシア連邦は、タイ、インドネシア、ブルネイ、シンガポール、フィリピン、5つの国家と接している。インドネシアとの国境は、カリマンタンとの国境であるサラワク州とサバ州であり、マレー半島西海岸全体が、マラッカ海峡をはさんでスマトラとの海の国境であるといえる。シンガポールとの国境を接するのは、ジョホール州であり、二箇所が橋で連結されている。フィリピンとの国境は、サバ州にあり、スルー海が海の境界線となっている。本研究で考察するマレーシアとタイとの国境線には、マレーシア側では4つの州 (ブルリス、クダ、ペラ、クランタン) とタイ側では4つの県 (サトゥーン、ソクラー、ヤラー、ナラティワート) が国境を接している。特にマレー半島西海岸側は、クアラルンプールからベナン、クダにかけてマレーシアの重要な工業地帯であり、マレーシアからタイへ輸送される94%の電子工業品が西海岸側の国境ゲートである鉄道国境であるブルリス州のパダンプサー、高速道路網の発展しているクダ州のプキ・カユヒタム、およびペラ州のベンカラ・フルのいずれかの国境ゲートを通過する。Nimitchai (2004) によれば近年、タイ側の工場、特に中部タイの工場において、マレーシアからの電気部品、自動車部品に対する高い需要がある。一方、東海岸側のクランタン国境の場合、西海岸側の3つの国境ゲートと比べると圧倒的にその取扱量は少ない。クランタン国境は河川を境界線とすることをその特徴とするが、クランタン州の3つの国境ゲートのうち、二つの国境には橋がなく、船で国境を越えることになる。また河川国境であるため、出入国管理事務所を通過しないインフォーマルな越境が、河川沿いに日常的に自然発生する。このように本研究の調査地である東海岸側のクランタン国境の決定的な特徴は、地形的に南タイ側と河川で結ばれた平地であるため、山岳地帯の多い西海岸側の国境地帯には見られない、川を介した越境がごく日常的に行われており、しばしば国境地帯の人々の経済基盤となってきたのである。

19) 2000年のセンサスによれば、クランタンの全人口は約126万であり、民族構成は、ブミプトラ

タイ南部サトゥーン県における仏教徒とイスラムの通婚を考察した西井(2002)が指摘するように、タイ南部国境地域のイスラム人口は、タイ語を話す西海岸側と、マレー語を話す東海岸側で大きく分かれる²⁰⁾。本研究で考察するタイ・マレーシア国境東部のマレーは、この後者のマレー語を話す人口に属しており、国境を越えて密接な関わりを持つ。クランタンは半島において最も保守的なイスラム社会であると認識されながらも、同時に古くからタイ仏教徒のコミュニティが北東部の海岸側に存在し、マレーシアの中で最も仏教

寺院の多い州であるという特徴を持つ。これはまさにこの空間がイスラム圏とタイ仏教圏のはざまに位置していることを示すものである。従来タイ・マレーシア国境東部地域における研究においては、そのマジョリティの人口であり農業や漁業に従事するマレー住民に関する人類学的研究を中心としてきたが²¹⁾、一方でマイノリティのタイ仏教徒²²⁾や農村に住むクランタン独特の中国系住民であるブラナカンチャイニーズに関する研究²³⁾も行われてきた。しかしながら、こうしたクランタン独特のマレー、タイ、チャイ

↗ (マレーおよび先住民のオランアスリ)が95%(121万人)、チャイニーズが3.5%(44,000)、インド系が0.3%(3,400)、その他(ほとんどがタイ)が0.6%(8,300)であった。一方、タイ・ナラティワート県の場合、2000年のセンサスによれば、県の全人口は66万人で、うち宗教別の人口構成はイスラムが82%(54万人)、仏教徒が18%(12万人)であった²²⁾。尚、タイ側には民族構成を示すデータがないが、イスラムは大多数がマレーであり、仏教徒はタイか中国系住民である(Taburan Penduduk Mengikuti Kawasan Pihak Berkuasa Tempatan dan Mukim 2000およびKey Statistics of Thailand 2002)。

20) Nishii 2002: 232.

21) クランタンにおいてマレー研究、特にジェンダーの視点から考察を行ったパイオニア的存在として挙げられるのが、1940年代初頭のクランタン農村におけるマレー家族、特に女性の家庭における地位を考察したファース(Firth 1943)の人類学的研究である。彼女は夫のレイモンド・ファースと共に日本軍が上陸する1年前まで、クランタン北部の漁村で調査を行っていた。ファースの研究では、いかにマレー女性が、家計で主導権を握ることによって、家庭での位置を構築していったのかという点が明らかにされている。一方、政治学的な視点からは、クランタンで圧倒的な支持基盤を持つ最大野党のPIMP(現在のPAS(Parti SeMalaysia)の政治的勝利の原因をイスラムという宗教的背景ではなく、むしろ近代に構築された階層化した不平等なクランタンの農民社会のエリートへの不満という背景に着目したケスラー(Kessler 1978)の研究が挙げられる。尚、日本人研究者では、1970年代からの30年というタイムスパンをかけてクランタンの一農村の経済社会的变化を詳細に記述した坪内(Tsubouchi 2001)の研究がある。一方、南タイ側の場合、1950年代後半から60年代前半にかけてパッタニの漁村を調査したフレイザー(Frazier 1966)の研究がそのパイオニアとして挙げられよう。フレイザーは当時の漁村社会における男女の経済的役割分担の様子、マレーと華人(市場での仲買人あるいは船のオーナー)との関係性などに関して詳しく考察を行っている。フレイザーの研究から40年を経たパッタニの漁村を調査したドライラジョ(Dorairajoo 2002)は、もはや漁業だけでは経済基盤が成り立たなくなったパッタニのある漁村の社会的変化を考察している。尚、ドライラジョの指摘にもあるように、マレーシアへの季節労働者が、もはやクダなどのマレーシア北西部への農業労働ではなく、むしろ、クアラルンプールなどの大都市への建設労働者などのサービス部門へのシフトが見られるという。

22) ユソフ(Yusoff 1993)はクランタンのタイ寺を調査し、タイコミュニティが、華人を含めた地元の仏教徒に宗教的サービスを提供し、華人コミュニティがタイ寺に寄付を行うことで経済的基盤を提供するという、パトロン・クライアント関係が成立しているのかを考察している。ちなみにこのユソフの研究に先行してクランタンタイの研究には、中国系住民とタイとの関わりを政治的アイデンティティの視点から考察したKershaw(1973)の研究がある。

23) こうした農村に住むブラナカンチャイニーズとは、特に彼らの衣食言語習慣において周辺のマレー農村環境の中で、しばしばタイとの通婚を経て、マレーやタイに文化的に同化が見られる。そもそもブラナカン(Peranakan)とは‘anak’(「子供」の意)がPer-anの形に活用されたものであり、マレー語で「現地生まれ」を意味し、しばしば、現地生まれのマレーの要素を内在化した中国系住民に用いられる。インドネシアでもこの呼び名は一般的に用いられている。クランタンにおけるブラナカンチャイニーズ研究には人類学者のTan(1982)や言語学者のTeo(2003)による研究 ↗

ニーズに焦点を置く研究では、彼らの国境を越えたつながりの様子がほとんど言及されていないのが現状である。最近になって、タイ側の人類学者を中心に国境を越えたつながりからタイ・マレーシア国境を捉えなおす動きが見られるようになった。このような研究には、クランタン側の国境におけるタイ系住民の国境を越えた関わりについて民族文化アイデンティティの再構築という立場から考察したジョンソン (Johnson 2002) の研究²⁴⁾ や、南タイ国境に住むタイムスリム女性のマレーシアへの移民労働とそのアイデンティティの関わりを扱ったツネダ (2006) の研究²⁵⁾ などがある。

本研究の調査地であるバンダクチルはクランタン州の北東部に位置し、州都のコタバルから30キロほど離れた場所にある。クランタンの地形はおおまかに北東の平野部と、山岳地帯の南部に分けることができ、国境地域は平野部に位置する。この地理的条件は、クランタンにおける人口集住パターンに大きな影響を与えてきた。北東部の平野部では稲作

が行われ、南シナ海沿岸からクランタン川沿いを中心に人口が集中した。一方の南部の山岳地帯はウル・クランタンと呼ばれ、20世紀前半に西洋資本によるゴム農園が導入される前までは、客家系移民の金鉱山であったブライを除いて、狩猟採集を行う先住民のオランアスリが主な住民であった。1931年のセンサスにおいても北東部の人口は全体の64%を占めるのに対し、南部(ウル・クランタン)の人口は全体の14%ほどであり、いかに北東部に人口が集中してきたかが分かる²⁶⁾。

経済的にクランタンは、タイ側のナラティワート同様に、最も貧しい州の一つに数えられている²⁷⁾。この背景にはゴム栽培、稲作、漁業など第一次産業が経済の中心であり、他地域と比べ工業化や産業化が積極的に行われてこなかったことが挙げられる。こうした産業の不在は、雇用機会を生み出さず、若い世代の都市部への流出を促し、結果としてクランタンは他州への転出率が最も高い²⁸⁾。一方のタイ側のナラティワートにおいても状況は同様であるが、この地域において顕著であ

／がある。一方、プラナカンチャイニーズというタームではなく、農村に住むチャイニーズをチナカンボン (Cina Kampong) と呼び、町のチャイニーズであるチナバンダー (Cina bandar) と区別した Winzeler (1985) の民族関係に関する詳しい研究がある。注意すべき点は、チナカンボンもプラナカンチャイニーズもいづれも、「自称」ではなく、「他称」であるということである。つまり、研究者のカテゴリー化の便宜上使用されているということをおぼろげに、留意しておく必要があるといえよう。

24) ジョンソンは、前述のユソフ (Yusoff) と同じタイ村を扱っているが、彼の視座はむしろユソフがそれほど強調しなかった越境という行為に伴う文化アイデンティティの形成にある (Johnson 2002)。

25) ツネダは、本研究の調査地に近いゴロック郊外のマレー農村での調査を行っているが、ツネダの国境への視座は、ジェンダーの視座を踏まえた人の移動およびその移動に伴うアイデンティティ形成に焦点が置かれている。特に興味深い点は、タイムスリム女性の越境に伴う帰属意識の変化である。ツネダの研究では南タイではムスリムとして周縁化された位置にありながらも、同時にマレーシアへの越境を経てタイ国民としてのアイデンティティの再認識が見られるという点が指摘されている (Tsuneda 2006)。

26) Baker 1936: 5。尚、クランタン南部地域は他の地域に比べ非マレー人口の割合が高く、新しい入植者のゴム農園や鉄道建設の労働者を中心としていた。クランタンにおけるマレー保留地が北東部に集中していることからこれは明らかである。

27) 2000年の数字では、クランタンにおける一人当たりのGDPが6,137リンギットであり、全国平均の14,582リンギットの半分以下の数字であった。クランタンにおける貧困率は、1970年の75%から2002年には12%までに減少したものの、国内ではサバ州に次いで2番目に貧しい州となっている (Leete 2004: Figure 3, 7)。また、2002年のタイ側のセンサスによれば、人口一人あたりの平均年収は85,951バーツであったが、ナラティワートの場合、34,357バーツと大きく平均を下回っている (Statistical Year Book of Thailand 2004)。

28) Laporan Penyiataan Migrasi 2001.

るのは、タイ側の大都市だけでなく、マレーシア側の大都市へ職を求めて向かう傾向がある²⁹⁾。特に南タイのマレー語を話すタイマレーにとって、言語宗教的に共通性を持つマレーシア社会に溶け込むことはそれほど困難ではない³⁰⁾。しかも、南タイはマレーシアと国境を接しており、首都のバンコクへ行くよりも、クアラルンプールやペナンへ出るほうが交通の便が良く、国境からの長距離バスなどの交通網も発達している³¹⁾。タイ・マレーシア国境東部は経済的には周縁化された地域であるが、一方で民族、言語、地理、経済的側面において国境を越えた密接な関わりが見られ、こうしたつながりは国境に生きる人々の日常において重要な役割を果たしている。

1. 人の日常的越境

3. 誰が国境を越えるのか? : インフォーマルな人の日常的移動

2002年の移民局の資料によれば、バンダクチル(マレーシア側)の年間の出入国者数の合計は、百万人に上る。入国者数の内訳を見れば、マレーシア国籍が約28万、タイ国籍が19万人と、マレーシア市民とタイ国民で占められていることが分かる³²⁾。一日平均で換

算すれば、出入国者数を合わせて三千名近い交通量であることが分かる。しかしながらこれは、移民局に旅券を提示した公的な出入国手続きを経た越境者の数であり、この数字には大部分の日常的な越境者は含まれていない。なぜなら日常的越境者のほとんどが、公的な出入国手続きを経ないインフォーマルな越境者であるからである。ここでいう「インフォーマルな越境」とは、冒頭でも述べたように、移民局で定められた法的な出入国手続きから逸脱する越境行為を指す。インフォーマルな越境者を含めた場合の公的な数字はないが、筆者の観察調査による計算からは、一日平均1万人近い交通量であると考えられる³³⁾。これは、バンダクチル側において7割以上の乗用車およびバイクが出入国事務所において旅券を提示していないことから明らかである。これに加えて一日千人近い数が船で越境していると考えられる。尚、こうした日常的な越境者の特徴としては、しばしば一日複数回国境を越えていることが指摘できる。では、一体誰が国境を日常的に越えるのか、である。以下の表は、ゴロック・バンダクチル国境を日常的に越える主な越境者の越境目的およびそのフローのあり方である。

-
- 29) 2004年の数字では、240万の外国人のうち、少なくとも半数の120万人が不法滞在者であるとの推定がなされており、こうした不法滞在者の多くが、インドネシア、フィリピン、ミャンマーそしてタイからの移民労働者であるという。("KL tighten immigration rules for foreign workers" *The Straits Times*, June 25, 2004)。尚、ツネダの指摘によれば、マレーシアにおける南タイからの労働者の傾向として、かつては、季節労働者として農業や漁業に従事するケースが多かったが、1980年代以降のマレーシアにおける工業化に伴い、建設現場やレストランなど都市部への移民が増加しているという(Tsuneda 2006)。
- 30) しかしながら、昨今の報告からは、こうしたマレーシアの大都市のレストランや建設現場などで働く南タイからのムスリムは、しばしば法的に不法移民であるため、「外国人」として区別されることで、逆に「タイ国民」としてのアイデンティティを強めているという事例がツネダの研究から指摘されている(ibid.)。
- 31) バンダクチルからもクアラルンプールやペナン行きの長距離バスが運行しており、南タイ側から国境を渡りバンダクチル経由で大都市へ入る事例が多く見られる。
- 32) バンダクチル移民局の内部資料より。
- 33) 単純に公的越境者と非公的越境者の割合を3:7で換算すれば、3,000名に対し、7,000名となる。筆者の移民局における観察(朝、昼間、夕方)では、朝の出入国と夕方の出入国が最も多く一時間に1000名近い数の出入国がみられたもの(バイク336台、車120台)、平均に直せば一時間につき500名(バイク200台、車60台)ほどであると考えられ、19時間の間に1万人という数字は妥当であると考えられる。

表1. ゴロック・バンダクチル国境における日常的越境者

越境の方向 越境目的	バンダクチル→ゴロック	ゴロック→バンダクチル
a. 生業：商店	ほとんどみられず	バンダクチル商店での労働（主にマレー）
b. 生業：市場	ほとんどみられず	バンダクチル市場での露店経営（主にマレー）
c. 生業：行商	ほとんどみられず	ゴロック側の市場で仕入れた野菜や果物の販売（主にマレー女性）
d. 通学	ゴロック市内の公立学校への通学（主にタイ系学生）	バンダクチル内の公立学校への通学（マレー学生および華人学生）
e. 買物	ゴロック市場での生鮮食料品の購入	バンダクチル側でのガソリンの給油，小麦粉，食料油，ハラル食品の購入

(筆者の現地調査に基づく)

3-1. 生業目的：バンダクチル商店街

まず、第一に国境における日常的な越境者として、バンダクチル側の商店への通勤目的の越境者が挙げられる。後述するように、バンダクチルの主な経済活動は、商店街と市場に大きく分かれる。こうした商店街で働く労働者の多くが、実はタイ側の住民であり、この傾向はほとんどの商店で見られる。彼らは、サンパンボートで越境するか、出入国管理事務所のある橋を経由してバイクなどで通勤している。そもそもバンダクチルの商店街は国境のゴロック川沿いに展開されており、商店のすぐ裏が船着場となっている。この立地条件は、タイ側の船着場からサンパンボートでバンダクチルの商店街に通うことを容易にする。越境者側にとってみればバンダクチルでの労働はタイ側で得られる収入の2倍近い額であり、一方のバンダクチルの店主にとっては、安価なコストで人を雇うことができるという利点が挙げられる³⁴⁾。こうした越境労働者に関して明確な数字は存在しない

ものの、計150軒を数えるバンダクチルの商店³⁵⁾のうち、一軒につき2-3人の労働者を雇っていると計算する場合、少なくとも400人近い数がバンダクチルの商店街で働く越境労働者であることが分かる。

ここで指摘しておきたい点は、バンダクチルの商店街で働く越境労働者はタイ側の住民であるということだけでなく、彼らは多くの場合マレーシア国籍を保有しており、必ずしも労働ビザが必要な「外国人」ではないということである。この主な背景として、バンダクチルの商店経営者たちは移民局の度重なる査察を経験しており、労働ビザ取得の手続や更新が面倒であることから、タイ側の労働者を雇う場合、マレーシア国籍を持つということを経験して、重要な条件とする。つまりすべてのゴロック側の住民がバンダクチル側で職を得ることができるのではなく、実は非常に限られたものであることが分かる³⁶⁾。このような越境労働者の法的地位の確保の姿は、後述するように、国境の日常的な越境において重要な

34) 一般的に、通常ゴロック側では月2,000-3,000 バーツ（200-300 リンギット）ほどが商店などで働く場合の一般的な収入であるが、バンダクチル側では月400-500 リンギットの収入を得ることができる。しかしながら、この額はクランタンの一般的な相場である月800 リンギットに比べると半分近い数字であり、バンダクチルの店主側にとっては、低いコストに抑えることができる（2005年1月現在）。

35) この数字は、2005年1月現在のものであり、内訳としては商店街が89軒、市場通りに37軒、その他が25軒を数える。

36) 本研究の調査地にごく近いゴロック郊外の農村で調査を行ったツネダによれば、むしろマレーシア側での法的地位を確保できないタイムスリムは、クアラルンプールやジョホールバルなどの大都市で不法就労化する傾向にある（Tsuneda 2006）。

暗黙のルールとなっていることを指摘しておきたい。尚、国境を越えて労働の場を求める越境者を国際法で考える場合、移民労働者 (migrant labor) に分類される。しかしながらこのような日常的越境者の場合、国境労働者 (frontier worker) として定義されており、長距離の移動を伴う移民労働者とは区別されて認識されている³⁷⁾。

3-2. 生業目的：バンダクチル市場

商店で働く越境労働者に加えて、もう一つの重要な生業目的の越境者としてバンダクチルの市場で商売を行う人々が挙げられる。もともとバンダクチルの旧市場は現在のバスターミナル、つまり船着場のすぐ近くであり、地域住民向けの生鮮食料品を取り扱っていた。しかしながら80年代初頭に商店街通りを越えた旧市場の南側により規模の大きな市場 (Pasar Besar) が建設されるとその商業形態はがらりと変わる。200以上の露店が並ぶ国内観光客向けの土産物を扱う市場として生まれ変わったからである。またこの市場の特徴はバンダクチル商店街のオーナーが華人を中心とするのに対し、露店を構える経営者のほとんどはマレーである。しかも興味深いことに、露店経営者の大半は、バンダクチルの住民ではなく、タイ側のゴロックの住民である。正確にどの程度の割合であるのかは不明であるが、①実際に市場で売られている多くの商品がゴロック側から持ち込まれたものであること、②タイパーツで商品を仕入れ、マレーシアリングットで販売し、売上金をタイパーツに両替することによって利潤を得る

というシステムとなっていることから、露店主の基盤をマレーシア側とタイ側の両方に持つことが彼らの経済活動において重要な条件となっていることが窺える。こうしたバンダクチル市場で商売をする越境者の数は、商店で働く越境労働者同様、その越境の性質がインフォーマルであるため、正確な数字はない。しかしながら200軒近い露店において、一軒あたり平均2-3名として計算する場合、少なくとも400名近い市場関連の越境者が存在すると考えられる。

3-3. 生業目的：行商

第三番目の生業目的の越境として、タイ側で仕入れた野菜や果物をクランタン側で売る行商が挙げられる。これは、生業目的の一つに数えられるが、商店街や市場関係者とは異なり、商売上の立地基盤を持たず、その移動はバンダクチル内だけでなく、近郊のパセマス、コタバルにまで及ぶ。こうした行商のほとんどは、タイ側に住むマレー女性³⁸⁾である。彼女たちは固定の商業活動の場を持たないため、その法的地位もバンダクチルの商店街や市場で働く越境者とは異なり、マレーシア国籍を持つケースは非常に少ないと考えられる。興味深い特徴として、こうした行商は一人もしくは二人という少人数によるものであり、その輸送手段はバイク便やバスなどの公共交通機関である。つまり、行商人自身で輸送手段を持っているケースは少なく、一度に輸送できる野菜や果物の量は限られている。しかしながら輸送量が少ないため、税関や国境警備隊による検査が甘くなる可能性が

37) UNHCR 1980, Article. 2(2) (a).

38) タイ側からの行商のほとんどがマレー女性であることについては、これまで詳しい調査がほとんどなされていないものの、タイ側のマレーの経済活動から考えられることは、マレー男性の場合、商売を持つ場合を除いて、農作業に従事するか、日雇い労働に従事、もしくはしばしば出稼ぎ労働者となっている。しかしながら、マレー女性にとって、それほど資本を必要としない行商の仕事は、家計を支える上で非常に重要であると考えられる。こうしたマレー女性の行商に関連して、パッタニの漁村で調査を行っているフレイザーや、クランタンの漁村で調査を行ったファースの研究の中で、女性が市場で収穫物を販売し現金収入を得る上での重要な経済活動となっている事例が挙げられている (Frazer 1966, Firth 1943: 66)。

高まり、タイ米など、輸入が厳しく規制されている商品をパセマスやコタバルなどの国境空間を越えた地域に持ち込むことができる。このような行商の事例は、本稿の7-2のところで詳しく考察する。

3-4. 通学目的

上述したようにバンダクテル・ゴロック国境における日常的な越境目的として、生業が一つの重要な要素となっていることが商店街と市場の事例から明らかになるが、このほかにもう一つの日常的越境として越境通学が挙げられる。こうした越境通学の場合、ゴロック側の住民が、バンダクテル側の公立学校に通うケースが圧倒的に多い。そもそもバンダクテルの町自体が、国境の川沿いに展開されており、バンダクテルの学校へのアクセスは比較的容易である。こうした越境学生の数は、後述するようにバンダクテルの学校数から少なくとも700名にのぼると考えられ³⁹⁾、この地域のマジョリティであるマレーが圧倒的に多い。こうした越境通学が成立する最も重要な条件は、マレーシアの出生証明書を持つことであり、つまりマレーシア国民であることにある。つまり法的地位の確保が上述した越境労働者同様、彼らの日常的越境において重要な条件となっているわけであるが、この越境通学者と法的地位の問題に関しては、後述する啓育小学校の越境通学生のところで詳しく考察する。

3-5. 買物目的

第五番目の日常的越境者として、買物目的の越境者が挙げられる。上記4つの越境がゴロック側からバンダクテル側への一方向であったのに対し、買物目的の場合、越境行為は双方向に見られる。具体的な越境目的としては、①バンダクテル住民によるゴロック市

場への買出し、②タイ側住民によるバンダクテル商店街へのマレーシア商品の買付け、③タイ側住民によるバンダクテルのガソリンスタンドでのガソリンの購入が挙げられる。第一のゴロックの市場への買出しは、バンダクテルに住む住民にとって重要な日常的活動の一つである。なぜならば、バンダクテル側では、日常生活に欠かせない生鮮食料品を扱う商店や市場がほとんど存在しない。上述したようにバンダクテルの市場はむしろマレーシア国内の観光客向けの土産品などが中心である。このため、バンダクテルの住民にとってゴロックの市場は日常消費生活において欠かせない場所となっているのである。尚、こうした朝市での買付けには、後述するようにマレーシアでは輸入が規制されている米も含まれている。一方、タイ側住民によるバンダクテルへの越境は、小麦粉、食料油、ハラル食品などマレーシア商品の買付け、およびガソリンの購入が挙げられる。特にタイ住民がバンダクテルで買い求めるガソリン、小麦粉、食料油などは、マレーシア側では政府の補助金によって低価格に抑えられている商品であり、輸出が規制されている。

以上のようにバンダクテル・ゴロック国境に見られる日常的越境者について、5つの越境目的から整理してみたわけであるが、その特徴をまとめると、以下の点が指摘できる。

- 大部分の日常的越境は公的な出入国の手続きを経ないインフォーマルな越境であること
- 日常生活に関わる活動（生業、通学、買物）であること
- その移動は国境空間内という、ある限られた一定の距離内で完結していること
- 一個人の日常的越境は、その越境目的が必ずしも一つに限らず、その一日あたり

39) この700名という数は、筆者がインタビューを行った川沿いの国民小学校で300名、国民中学校で200名、啓育小学校から85名（幼稚園を含める）、その他二つの小中学校の推定（140名）をあわせた数である（2004年現在）。

の越境数もしばしば複数回に及ぶこと一生涯や通学目的でタイ側に住む住民がバンダクテルに越境する場合、その多くが法的にはマレーシア国籍を保有する、つまり二重国籍者⁴⁰⁾であること

これらの特徴は、特に一定の範囲内において国境線を越えて生活領域が形成されていることを示すものであり、インフォーマルな越境が日常化する空間の特徴である。では、このようなインフォーマルな越境が日常化する生活領域が国境に形成される条件は何であるか、である。これを理解するには、越境者側だけでなく国境を管理する側の双方の視点から考える必要がある。ここではまず国境における人の移動の管理がどのように行われているのかを考察し、その上で越境者側の問題である法的地位に関して考察する。

4. 国境における人の移動の管理

バンダクテルにおける国境管理の歴史は、1921年の国境鉄道の開通と共に始まるが、当初は移民局は設置されず、鉄道内で税関職員によって行われるものが主体であった⁴¹⁾。1973年の国境の橋の完成によって初めてこの国境において、近代的な移民局および税関の施設が設置され、これによって正式に川で

の越境が非合法化する。現在の出入国管理事務所には、移民局、税関、警察、駅関係者など総勢200名近い公務員が配置されている⁴²⁾。興味深いことにもともと鉄道が開通した当時の1920年代におけるバンダクテルの都市計画では、現在の駅の西側に経済の中心が置かれていた⁴³⁾。しかしながら実際に戦後人々が町に入植し、経済の中心が形成されたのは西側ではなく駅の東側であった。この背景には、東側は西側に比べてより川岸が広く高低差が緩やかであり、川を介したモノの移動において好都合であったことが考えられる。

国境とは国家の法律に定められた出入国手続きに基づき、国境を越えようとする人、モノが法的に合法・非合法に選別される場である。しかしながら、実際の国境の日常を眺める場合、インフォーマルな越境者は、バンダクテル国境においては大多数を占める。こうしたインフォーマルな越境者に対して、国家は無関心であったわけではない。国境住民の日常的な越境に関しては、1940年にタイ側と国境を接する北部マレー4州（クランタン、クダ、ペラ、プルリス）の間で越境に関する合意書⁴⁴⁾が取り交わされ、現在もなおこの合意書に基づいて両国の国境住民の越境が規定されている。それによれば、国境線から25キロ以内の南タイ側の住民および、北部マレー4州の住民⁴⁵⁾に対して、ボーダー

40) タイにおいて二重国籍は認められているものの、マレーシアにおいて二重国籍は原則的に禁止されている。しかしながら実際にはこのクランタン・ナラティワート国境地域だけでも二重国籍者の数は推定で3万人にのぼるとされる。特に2004年1月以降の南タイにおける一連の分離主義テロ活動の活発化に伴い、こうした分離主義活動家たちの多くが二重国籍者であり、彼らが国境を自由に行き来する原因となっているとのタイ政府からの批判が出ている（“Bangkok to ask KL to revoke citizenship of 30,000 Thais” *The Straits Times*, Apr 3, 2004）。

41) British Adviser Kelantan File K1188/21. 川沿いには、警察署が設置されたが、これも、川沿いの人やモノの規制を十分行えるものではなかった。1949年にバンダクテル側に移民局が設置されると、それまでの税関が行っていた人のチェックをバンダクテル側で行うようになる。

42) 主な内訳は、移民局59名、税関101名、警察関係18名、道路管理6名農業部11名、動物管理部2名である。

43) British Adviser Kelantan File K 761/19.

44) “An Agreement between the Government of the Malay states of Kelantan, Kedah, Perak and Perlis, and the Royal Thai Government, with respect to traffic across the boundary between the Malay States and Thailand.” *Legislation in Kelantan in 1939, 1940: 423-427.*

45) マレーシア側の住民とは、18歳以上の3年以上の居住条件を持ち、市民権か永住権を持つもの /

表 2. バンダクチルで発行された旅券および通行証の発行数

	ボーダーパス (<i>pas sempadan</i>)	臨時通行証 (<i>kad lawatan</i>)	国際パスポート
2000年	26,457	30,917	212
2001年	27,922	28,704	149
2002年	28,050	24,968	114

(2003年3月バンダクチル移民局からの入手)

パス (*Pas Sempadan*) を発行し、同範囲内における移動に関して、旅券のみならず、ボーダーパスでの越境が許されている⁴⁶⁾。これは明らかに国境住民の日常的な越境を国家が管理しようとする試みであったことが分かる。尚、このボーダーパスの他に、タイ国民に対してのみ発行される臨時通行証 (*kad lawatan*) というものがあり、国境線から3 km 圏内の移動に限り、旅券やボーダーパスがなくても、身分証名証の提示があれば、移民局で臨時通行証を即座に発行し、入国が認められる⁴⁷⁾。しかしながら、これはマレーシア側の国境において特に免税区への観光客の誘致を目指したものであるため、通行証の期限は一日であり、マレーシア市民に対してはこうした措置はとられていない。以下の表は、2000年から2002年までにバンダクチルの移民局で発行された主な旅券の発行数である。

上記の表からも分かるようにバンダクチルの移民局では、国際旅券の発行よりも、ボーダーパスや臨時通行証など、国境域内の移動のための通行証の発行が中心である。この

ボーダーパスの発行数とバンダクチルの人口を比較すると明らかなることであるが⁴⁸⁾、日常的な越境行為そのものは法的な越境手続きを経ないインフォーマルな越境であるものの、こうした越境者は少なくともボーダーパスという法的な通行証の保持は行っているという点が指摘できる。ボーダーパス保持者の越境手続きは、パスポート保持者と同様であり、出入国管理事務所でボーダーパスを提示し、そこに出入国の判が押される。しかしながら、日常的な越境においては、ボーダーパスの確保はされているものの、法的手続きがその越境行為の中で省略されているのである⁴⁹⁾。実際に筆者がインタビューを行ったバンダクチルにおける日常的越境者たちは、自ら所有するボーダーパスの有効期限に対して明確な認識を持っていた。彼らは日常的な越境時においてボーダーパスを提示することはないものの、「有効なボーダーパスを所持すること」そのものが自らのインフォーマルな越境行為を合法化するものであると越境者たちに認識されているのである。

原則的に、法的な出入国の手続きにおいて、

ノ を示す。

- 46) このボーダーパスは一回の申請につき与えられる有効期間は半年であり、つまり半年ごとにボーダーパスを切り替えなければならない (*ibid.*)。またボーダーパスの発行手数料であるが、2005年現在は10リンギットであり、パスポートの発行手数料は、32ページが300リンギット、64ページが600リンギットである。
- 47) *Immigration Act 1959/1963 (Act 155) & Regulations and orders & Passports Act 1966 (ACT150)*
- 48) 一人につき年2回発行を行っていると考えれば、13,500名に発行していることになり、2000年のバンダクチル全体の人口(市街地および周辺の農村部)23,000名を考えれば、ほとんどの国境の労働人口(18-55歳)がボーダーパスを保持していると考えられる。
- 49) 実際に筆者がインタビューを行った日常的越境者は、自ら所有するボーダーパスの有効期限に対する認識を持ち、日常的な越境時にはボーダーパスを提示することはないものの、ボーダーパスを所持することによって、法的には自らの越境が合法化されると認識している。

個人は国家の前に無力である。その出入国を判断する権限は国家のみに与えられ、個人は国境線の前でその扉が開かれるかどうかの判断を待つしかない。そこには常に法的に出入国が「許可されない」という可能性も含んでいる。しかしながら、日常的な越境者を眺める場合、そうした国家と個人の間における緊迫感が見られない。では、一体こうしたインフォーマルな越境者を国家は管理していないのか、である。本研究では、むしろ移民局など国家装置による選択的な法の適用の姿に注目する。つまり国家装置は、二種類の越境者を分別し、日常的な越境者に対しては公的な出入国の手続きを必ずしも求めていないのである。そしてさらに重要なことは、この国家装置による選択的管理の一方で、上述したように越境者自身が法的地位の確保を明確にしている点である。これは、上述のバンダクチルにおけるボーダーパスの発行数および、バンダクチルへの生業および通学目的の越境者の多くが二重国籍者であるということからも明らかである。この越境者側の法的地位の確保については、さらに詳しく理解するために、バンダクチルにおける実際の越境通学の事例から考察を行うことにする。

5. 越境通学者と法的地位

上述したようにタイ・マレーシア国境における越境通学者において、ゴロック側からバンダクチルに通う数が圧倒的に多い。現在、バンダクチル内には、計4つの小学校と1つの中学が存在するが、筆者の調査からは、バンダクチル内の学校においては3割近い学生が越境通学生であると推定され、小中学校を合わせて少なくとも700名近くの日常的越

境通学生が存在すると考えられる。

5-1. バンダクチルにおける越境通学の子供たち

早朝のバンダクチルの川沿いや国境の橋には、マレーシアの公立学校の制服を着た学生たちの姿があちこちに見られる。ゴロック側の船着場からサンバンボートに乗り込むもの、父母のバイクや車で出入国管理事務所を通過するもの、歩いて国境の橋を渡るものなど、さまざまである。こうした越境通学生たちの多くはゴロック側に住み、バンダクチルの公立学校に通っている。なかでも、バンダクチル国民小学校は、その立地が川沿いにあることからこうした越境通学生が最も可視化される場である。もともと同校は英語を第一言語とする英小として1950年代半ばに設立された⁵⁰⁾。現在は生徒数が増えたため、学校が2つの学校に分かれている。二校合わせて、現在の生徒数は計1,200名であり、バンダクチル国民小学校の副校長によれば、この4分の1の学生、つまり300名近い学生がタイ側からの生徒であるという⁵¹⁾。そもそもなぜこのようにゴロック側からの学生が越境通学しているのかについて、副校長は、「マレーシアの出生証明を提示されれば、彼らを受け入れないわけにはいかない」という。つまり、その居住地に関わらず、マレーシアの出生証明書さえあれば、マレーシア国民として、マレーシア側の公立学校で教育を受けることができる⁵²⁾。つまり彼らはタイ側の住民でありながらも、「マレーシア国民」であり、国民教育を受ける権利があるというわけである。それではなぜ、南タイ側から通う学生がこれだけ多いのか?である。副校長は3つの点、すなわち第一に南タイでマレー語教育を受けるのは難しいこと、第二に一般的にマレーシ

50) マレーシアでは1961年の新教育令によって、英語を第一言語とする英語系の公立小学校が、マレー語を第一言語とする国民小学校に再編成されている。

51) 2005年1月9日のバンダクチル国民小学校におけるインタビューより。

52) もちろんこの出生証明という条件だけでなく、小学校の学生登録の際に、マレーシア側の住所の提示が必要とされる。この点に関しては後述する啓育小学校の事例を参照。

ア側で得られる収入はタイ側よりも高いため、マレーシア側で教育を受けるほうが将来的に就業や商売において有利であること、第三に昨今のゴロックのマレーの間でクランタン側の病院で出産する数が増えていること、を挙げる。

まず、越境背景の第一の理由は言語・宗教的理由として位置づけることができるが、まさに現代のタイにおける教育環境と関わる問題である。そもそもタイにおいては1930年代末以降、急速にタイナショナリズムに基づく教育の一元化が行われ、国語（タイ語）以外の言語教授が教育の場において規制された。この国民化教育において規制の主な対象となったのは華語教育であった⁵³⁾が、同様にマレー語教育もまた規制されていった。現在の南タイにおいて、マレー語教育を受けることができるのは、私立の宗教寄宿舎学校（pondok）のみであるが、このポンドックはほとんどが政府の認可を受けていない学校であり、公立学校におけるマレー語教育の機会は皆無である⁵⁴⁾。越境背景の第二の理由は経済的環境に関わるが、特に南タイのマレーにとっては現実的問題である。上述したように南タイの東海岸側の南部国境3県は、経済的に最も貧しい地域にある。しかしながら一方で距離的には、バンコクよりも国境を越えたマレーシア側への交通のアクセスが良く、また南タイ側のマレーはマレーシアの国語で

あるマレー語を話すため、マレーシア側での就職が可能である。こうした背景からも、マレーシア側で教育を受けるということは社会的モビリティを獲得する一つの重要な手段である。最後に挙げられた、タイ側のマレーがクランタン側で出産する数が増えているという点に関しては、越境通学においてマレーシア側の出生証明⁵⁵⁾が最も重要な条件であることを示す。タイ・マレーシア国境において二重国籍を持つ人口は、推定では3万人とされ、この地域において二重国籍を持つことはそれほど特別なことではない。しかしながらここで明確にしておきたい点はマレーシア国民となる条件は、この出生証明だけでは成立しないということである。このほかに国民である条件として、両親のどちらかがマレーシア国民であることが挙げられる⁵⁶⁾。つまりすべてのマレーシア生まれが国籍を獲得できるわけではなく、夫婦どちらかがマレーシアの市民権を持つケースに限られるといえる。つまり、バンダクチルに見られるゴロックからの越境通学者は、ゴロックマレー全体から見れば一部にすぎない、つまり、マレーシア国籍を持つものに限られるということである。このように越境通学における法的地位の確保は絶対的な条件であり、その越境条件は特定の人口に限られていることが分かる。それでは、全体的な文脈としてのバンダクチルにおける越境通学者の現状を理解した上で、

53) タイナショナリズムにおける華文教育への規制に関しては Coughlin (1976) を参照。

54) Wyatt 1982: 267.

55) マレーシアの出生証明はA4ほどの大きさの紙であり、主に子供の情報、父親の情報、母親の情報の3つの部分に分かれる。この出生証明で興味深い点は、どちらかの親がマレーシア国籍を持たない外国人である場合、イスラム教徒であっても、*keturunan*（民族）はMelayuとは表記されず、ThaiやIndonesiaなど出身国が記載されるということである。*keturunan*とは本来マレーシア国民の中の民族カテゴリーを示すものである。しかしながら、外国籍の場合、*keturunan*の欄は国籍が表示されるのである。特に民族カテゴリーにThaiが存在するマレーシアでは、マレーシアのタイ系住民とタイ出身のマレー住民の*keturunan*が同様にThaiと表記されてしまうという特徴を持つ。つまりここでは、民族集団と国籍の混同が見られる。基本的に子供の*keturunan*は両親の国籍に関わらずムスリムの場合、Melayuに分類されるが、非ムスリムの場合子供の*keturunan*は父親の民族集団がそのまま受け継がれる。

56) マレーシアの国籍法によれば、独立後（1957年）にマレーシア国内で生まれた場合、両親のどちらかがマレーシア国籍であるかもしくはマレーシア永住権保持者であることを条件とする（*Malaysian Citizenship Rules* 1964）。

啓育小学校の越境学生のケースを考察する。

5.2. 越境通学の条件と背景：啓育小学校のマレー学生の場合

本研究で考察する啓育小学校はバンダクチルにある華文小学校であり、付属幼稚園も含めた2004年の全校生徒数287名中、マレー学生数が7割以上(208名)を占め、マレーシア国内でも最もマレー学生の割合の高い華文小学校の一つである⁵⁷⁾。この学校の特徴は、マレーがマジョリティを占めるというだけでなく、他のバンダクチルの小学校同様、越境通学者の存在が挙げられる。「実のところ、我々は誰がどこから通っているのかは、はっきりとはわからない」と、新入生登録時の啓育小学校付属幼稚園の先生がこぼす。彼女によれば、登録日に提出されるマレーシアの出生証明のコピーや登録の住所はすべてバンダクチル側に住むマレーシア国民であることを示すものばかりであり、ゴロック側に住んでも、正式な書面には現れないのだという。この付属幼稚園の先生の言葉からも分かるように、啓育小学校の越境通学者数は公的な数字に表れることはない。学校側は10%程度という数字を提示しているが、実際の数はこの割合よりも多いと考えられる。2003年度の啓育小学校の卒業アルバムでは、卒業生15名のうち、ゴロック側の連絡先を提示しているものが5名あり、啓育小学校においても3割近い学生が越境者であると考えられる。

啓育小学校における越境通学者の特徴として、華語を母語としないマレー学生を中心とする、という点が挙げられる。彼らは、他のバンダクチル越境通学者同様、マレーシアの出生証明を持つ。まざタイ・マレーシア国境東部という文脈で考えた場合、タイ側のマレーが越境通学を行う要因として、上述した

ように言語・宗教的環境および経済的要因の二つが挙げられている。しかしながら、啓育小学校の場合、この言語・宗教的環境はあてはまらない。なぜならば、華文小学校の第一言語はマレー語ではなく華語であり、しかもムスリムの宗教的基盤を持たない。それではなぜ言語・宗教的環境のない華文小学校にマレーの子供たちは越境通学を行っているのか、である。筆者の調査からは、こうした啓育小学校に越境通学を行うマレーの学生の多くは、バンダクチルの市場や商店街の経済に関わる家庭環境にあることが明らかになった。上述したようにバンダクチルの市場において商売を行っているのは、主にゴロック側に住むマレーである。また商店街でもゴロック側のマレーが多く雇用されている。つまり、バンダクチルに生業の基盤があるマレーたちの一部がバンダクチルの華文小学校に子供を通わせているということになる。特に華語という第三の言語が習得できるということは、市場や商店で商売を行うマレーたちにとっては、一つの魅力的な要素である。またそもそも啓育小学校の学生数全体においてマレーがマジョリティを占めること、そして啓育小学校のカリキュラム自体が教育省の下で統一されており、マレー語やムスリムとしての宗教実践が保持できることは、タイ側のマレーにとって国境の華文小学校は十分に選択肢の一つとなっているのである。

興味深いことに、啓育小学校におけるマレー学生の増加はバンダクチルの市場の形成と密接に関わっている。現在のマレーシア国内観光客をターゲットとする現在の市場の建設は1980年初頭であるが、これは、啓育小学校においてマレーの学生数が増加しはじめた時期と一致する。つまり、啓育小学校におけるマレー学生の増加は、この市場の形成期とほぼ重なることが分かる。これは越境学生

57) 2004年度の啓育小学校の学生数の内訳は、小学校の生徒数182名中、マレーが123名、華人とタイをあわせた数が69名であった。幼稚園の生徒数は105名中、マレーが85名、華人とタイをあわせた数が20名であった。

の多くがバンダクチルに生業基盤を持つ家庭の出身であることから明らかである。一般的にタイ側マレーの越境の一つの理由として、母語であるマレー語教育を受けることが指摘される。しかしながら、実際に啓育小学校におけるマレーの越境から窺えることは、民族母語教育という理由よりもむしろ現実的な要素である経済的実益が優先されているということである。現在のマジョリティのタイマレーがタイ語教育に基づいてタイ国民としてのアイデンティティを形成しており、かならずしもタイマレーの教育認識において民族母語教育が絶対的要素として存在しているとは言えないと考えられる⁵⁸⁾。

バンダクチルにおいて越境通学は日常的越境の中でごく普通に見られることであるが、その越境者をゴロックのマレー人口の中に位置づけて考えれば「マレーシア国籍を持つ」という条件を持つ一部のマレーに限られ、出生証明という法的地位が越境通学という日常的越境において絶対的な「条件」として機能している姿が窺える。筆者の調査地にほど近いゴロック郊外の農村でタイムスリム女性のマレーシアへの労働移民について考察したツネダの報告では、マレーシア側の大都市で労働するタイムスリムの経験として、マレーシアのマレーとは同じ言語宗教を共有し同じ民族カテゴリーのマレーとして認識されながらも、一方で彼らの周縁化された経験は、かえってタイ国民としての認識を強めていることの指摘がなされている⁵⁹⁾。こうした労働者たちの越境においてはしばしば法的地位が確保されておらず、本研究で考察する日常的越境者とは、全く異なる経験を経ており、いかに越境という行為において法的地位の確保が重要な条件となっているかが理解できよう。

II. モノの日常的越境

6. バンダクチルにおける経済活動：インフォーマルなモノの移動

以上のようにバンダクチルにおけるインフォーマルな人の移動について考察し、国境管理における選択的管理および越境者側による法的地位の確保という二つの条件が、インフォーマルな日常的越境において重要な要素となっていることが理解できた。それでは、インフォーマルなモノの日常的越境に関してはどのような姿が見えるであろうか。ここではバンダクチルにおける経済活動の様子から考察を行うことにする。以下の表に見るように、バンダクチルの町は、商店街とパサー（市場）区に大きく分けることができ、その取扱商品、顧客の種類からさらに4種類に分類することができる。

バンダクチルにおける経済活動について、主な特徴として以下の3点が指摘できる。第一の特徴として、商店街は主にタイ市場向けの商品を取り扱っているのに対し、パサー（市場）区はマレーシア国内観光客をターゲットとした商品を取り扱っているという点が挙げられる。このような差異の背景には、それぞれの形成背景の違いがある。つまり商店街区は主に川沿いを中心に発達した自然発生的な商業形態であるのに対し、パサー区の場合は、1980年代初頭に政府によって計画建設され、当初からマレーシア国内観光客をターゲットとされていた。第二に、上述の表からも明らかであるように、バンダクチルで扱われる商品は、地域住民のための日常消耗品ではなく、タイ市場やマレーシア国内観光客など特定の顧客にターゲットを絞った、特殊化された商品である。第三に商店街における商店経営者は華商を中心とするバンダクチルの住民であるのに対し、パサーにおいてはマレーを中心

58) Tsuneda 2006.

59) *ibid.*

表 3. バンダクチルにおける商業形態

場所	商業形態	顧客市場	経営者	取扱商品
商店街 (89 軒)	卸売 (サンパン貿易)	タイ市場向け	バンダクチルの華人およびマレー	マレーシア産ハラル食品, 輸入農産物, おむつ
	小売 (商店)	タイ市場向け	バンダクチルの華人およびマレー	日用雑貨, 携帯電話, 布, 電器製品, カーペット, 工具
パサー区	小売 (商店 62 軒)	マレーシア国内 観光客向け	バンダクチルのマレー	タイ産のバッグ, 布団, 装飾品, インテリア品, 洋服
	小売 (市場)	マレーシア国内 観光客向け	ゴロックのマレー	タイ産の果物, 乾物, 米, 装飾品, 洋服・布類, 食器類

(筆者の現地調査に基づく)

とし、しかも彼らはバンダクチル住民ではなくタイのゴロック側の住民であるという点が挙げられる。以下に実際の商店街におけるサンパン貿易およびパサー（市場）の様子を考察する。

6-1. サンパン貿易

バンダクチルにおいてサンパン貿易を行う店は、商店街の 89 軒中 12 軒であるが⁶⁰⁾、その経済規模は他の経済活動と比べて利潤が高く、今も尚、国境経済を支える重要な経済活動の一つである。そもそも「サンパン貿易」という名称は、筆者が便宜上使用している言葉である。バンダクチルにおいて見られるサンパン貿易とは、店の裏戸口から川岸までの間を 3 メーター近くある細長い板を置くことによって、商品を店から船（サンパン）まで荷下ろしする。つまり一枚の板が店の裏戸口とサンパンをつなぐスロープとなっているのである。一般的に華商の間では、その商品が下ろされる状態を形容し「下貨 *xia huo*」と呼ばれている。この貿易は川を介して行われるため、税関を経ることはなくマレーシアの公的な輸出データの数字には含まれない。つまり法的には「密輸」である。バンダクチルのサンパン貿易商の規模では一、二を争うある華商の店⁶¹⁾では、一日に少なくとも 15 艘のサンパンが裏の船着場に到着するという。

こうしたサンパン貿易を行う店の特徴として、店の表戸口では小売を行うのに対し、川沿いの店の裏戸口ではタイ側に卸売を行うということが挙げられる。そして注目すべき点として、店の裏戸口で行われる卸売、つまりサンパン貿易が主な収益であり、小売は 1 割程度にすぎないという。

一般的にバンダクチルの川沿いの商店は、マレー半島においては典型的なショップハウスであり、奥行が長く、1 階部分は商店と倉庫、2 階部分は店主家族の住まいとなっている。サンパン貿易を行う店では、商店の奥の倉庫側が川沿いとなっており、倉庫のすぐ外は上述したようにスロープのある船着場となっている。ゴロック側からサンパンが到着すると倉庫からスロープを介して商品を船に積みこんでいく。そして商品が山積みされたサンパンが数分もしない間にゴロック側の川岸に到着すると、こんどは川岸で待ち構えていたバイク便数台が、商品をバイクの荷台や膝の上に抱え、ゴロック駅もしくは、ゴロック市内の倉庫に運ぶ。そしてこれらの商品が周辺部のヤラーやナラティワートなどに運ばれるのである。これがサンパン貿易の全工程である。現在、サンパン貿易で扱われる商品は主に、スナック菓子、麺類など南タイ側のムスリム向けのハラル食品が中心である。この他に、タイ側で国内農産物の保護のために

60) 2005 年 1 月現在の数字。

61) バンダクチルでサンパン貿易を行う商店 12 軒のうち 7 軒は華商の経営である。

輸入が規制されている安価なオーストラリア産の玉ねぎや、マレーシアで製造されるおむつなどを取り扱っている店もある。興味深いことに、このサンパン貿易におけるモノの流れは「マレーシア」側から「タイ」側への一方通行であり、その逆は、バンダクテル商店街では行われていない。これは、もちろん国境警備隊がタイ側からマレーシア側に入る商品を厳しく管理しているのに対し、タイ側ではそうした管理の目が不在であるという二つの国家の異なる国境管理のあり方に大きな要因があると考えられる。しかしながらまた立地上の背景として、ゴロック側の商店街が川沿いではなく、駅を中心に発展したのに対し、バンダクテルの商店街は川沿いを中心に発展したという二つの国境の町の異なる空間形成のあり方にも見出すことができる。また注目すべき点として、買い物目的の越境者のところで取り上げたように、ゴロック側の越境買物客が購入するマレーシア産の小麦粉や食用油に関しては、輸出が制限されているため、サンパン貿易では取り扱われていない。つまり、サンパン貿易そのものは法的には「密輸」であるものの、そこで扱われる商品は法律で輸出が規制されているものは扱われていないことが分かる。

6-2. パサー（市場）

バンダクテルのパサーは、国境を訪れるマレーシア国内観光客向けにお土産用となるタイ産の商品を扱っており、バンダクテル住民向けの市場ではない。もともとこのパサーは川沿い（現在のバスターミナル）に位置し、1970年代まではむしろ地域住民向けに生鮮食料品を扱う小規模な市場にすぎなかった。現在のパサーは、1980年代初頭に建設されたもので、旧市場の南側に位置する。上述したように商店街は自然発生的なものであったのに対し、パサー区は州政府の開発プロジェクトの一環で建設されたものであり、当初から国内観光客をターゲットとしたものであ

た。道路幅の狭い商店街からパサー区に入るとまず広い通りが広がっており、週末には観光バスなどが数台は十分に停めることのできる駐車スペースがある。つまり、この市場の建設の当初から国内観光客を見込んで市場が建設されたことが分かる。パサー区は、200軒近くの小さな露店から構成されるパサー（市場）とそれを取り囲むようにしてショップハウスが並んでいる。パサーおよびショップハウス共に国内観光客向けにタイ商品や中国製品を扱っており、主に食品（タイ産の果物、乾物、米）、装飾品（みやげ物用のキーホルダー、髪留め、サングラス、帽子）、洋服・布類（Tシャツ、パジャマ、バジューロン（マレードレス）、バジューロン用の布）、食器類（鍋やプラスチックの食器）、おもちゃなどが売られている。このパサーの主な特徴としては、第一にマレーシア国内観光客向けであること、第二にタイ製品を主に扱っていること、そして第三にパサーで店を持つ経営者の多くは、バンダクテルの住人ではなくゴロック側の住人であるという点が挙げられる。市場で商売を行うゴロック側の住民は、非合法にバンダクテルで商売を行っているのではない。政府から営業許可を取得し商売を行っている。この営業許可の取得にはマレーシアでの法的地位、つまりマレーシア国籍を持つということが条件となっているのである。上述の啓育小学校の越境通学の子供たち事例からも、このパサーで商売を行う家庭の出身であることが明らかになっており、ゴロック側に住みながらもマレーシア国籍を持つ親がその子供をバンダクテル側の啓育小学校に通わせることができるのである。

7. インフォーマルなモノの移動の管理：タイ米のフローから

バンダクテルパサーの大きな特徴は、マレーシア観光客向けにタイ商品を扱っていることであるが、もう一つの特徴としてマレーシア国内ではその流通が厳しく管理されてい

るはずのタイ米が売られていることが挙げられる。そもそもマレーシアにおける米の輸入は、国産米の保護のため、米輸入業モノポリの Bernas⁶²⁾ によってその輸入権が専有されており、密輸に対しては厳しい措置がとられている。特に安価なタイ米の密輸入は長年マレーシア政府にとって大きな悩みの種であり、タイ・マレーシア国境における密輸管理において麻薬・武器と並んで検査の厳しいアイテムの一つである。そもそも 1978 年にゴロックとトゥンパット（クランタン北東部の港）を結ぶ国境間の鉄道サービスが廃止されたのも、その原因の一つはタイ米の密輸であるとされている。バンダクチルのパサー入口には、「稲米、稲米類食品の持込販売禁止。違反者には 1 万リングットの罰金もしくは、原価の 10 倍の罰金を課す」とマレー、ジャウィ（アラビア語）、タイ、中国語の 4 言語で書かれた米の密輸に対する警告の看板が立てられている。ここで重要な点は、輸入米に対する厳しい罰則措置があるにもかかわらず、タイ米がバンダクチルの市場で売られている、という点である。一般的にバンダクチルの住民たちは、タイ米を日常的に消費しており、バンダクチルのパサーやゴロック側の市場で購入している。つまりバンダクチルにおいて、タイ米の消費はある種ごく当たり前のことであり、彼らがコタバルなどのスーパーで売られている正規の輸入米を購入することはない。2004 年にバンダクチルで洪水があった際に華人政党の馬華（MCA）のバンダクチル支部から被災家族に対して米の支援が行われたが、その際にも米はゴロック側

の市場からバイク便で持ち込まれたものであり、これは税関手続きを経ていないタイ米であった。このようなタイ米のインフォーマルな越境から窺えることは、国境におけるインフォーマルなモノの管理が、必ずしも国境線上で管理されているのではないということである。インフォーマルな越境はむしろ国境線から 5 キロほど離れた場所にある国境警備隊のチェックポイントで管理されている。こうしてインフォーマルなタイ米の越境は、バンダクチル内で消費されるに関してはその越境が許されるものの、国境空間（生活領域）を越える場合、直ちに国家の管理が入るのである。この国境管理のメカニズムをより明確にするために、インフォーマルな越境管理を行う国境警備隊および実際に国境空間を越えようとする米の密輸の管理について、あるマレー女性行商の姿から考察を行う。

7-1. 国境警備隊の役割

冒頭でも述べたようにバンダクチル側の川沿いには、国境警備隊の PGA⁶³⁾ の存在があり、タイからの不法入国者や米、麻薬、武器など、輸入が厳しく制限されている品目の密輸を取り締まる目的で配備されている。バンダクチル国境周辺だけで 400 名近くの国境警備隊が配置されていると言われる⁶⁴⁾。マレーシアの国境警備隊（PGA）は、国境の川沿いだけでなく、国境線から 5 キロほど離れた距離に複数箇所設置された PGA チェックポイントに配備され、ここが川沿いでの監視と並んで重要な役割を果たしている。このチェックポイントを通過するすべての車両が

62) Bernas の正式名称は Padiberas Nasional Bhd. 前進は食糧庁 (Lembaga Padi dan Beras Negara's (LPN) であり、1996 年に民営化された。Bernas は米の輸入の独占を行うだけでなく、国内産米の農家からの買取、精米なども行っており、マレーシア国内における米の価格の安定を図ることを目的としている。ちなみに輸入された米の流通に関しては、Bernas が行うのではなく、契約する 7 つの業者が行っている。尚、1999 年における輸入米 600 万トンのうち 40% がタイからであった (Asian Economic News. May 28, 2001 および Bernas のウェブページである <http://www.bernas.com.my/ourcompany.htm> より)。

63) PGA とは Pasukan Gerakan Am の略称、英語名は General Operation Forces。

64) 2000 年のバンダクチル区において押収された密輸米の総額は、36,856 リングットであり、699 人が逮捕されている (“Pelajar Diperguna Seludup Beras” *Utusan Malaysia*. Jan 15, 2001)。

検査の対象となる。この対象には、公共バスも含まれる。繰り返すようであるが、バンダクチルの経済はインフォーマルなモノの取引によって支えられており、商店街の裏側の川を介してタイ側へ運ばれるハラール食品、そしてバンダクチルの市場にもたらされるタイ側の果物や米、みやげ物が主なインフォーマルなモノの動きである。こうしたバンダクチルの経済を支えるインフォーマルなモノの越境は、不思議なことに川沿いに配置されたPGAによって管理されることはほとんどない。では一体、国境警備隊はどこでどのようにインフォーマルなモノの越境を管理するのか、である。そもそも川沿いに配備された国境警備隊は、日常的な越境者をその管理の対象とはしていない。ライフル銃を装備した国境警備隊の姿は、むしろ輸入が厳しく制限されている武器、麻薬を密輸しようとするものに対する警告のようでもある。同様に厳しく規制されている米に関しては、国境空間内に限りその消費が許されているが、その流通範囲は国境線から5キロほど離れたPGAチェックポイントまでの国境空間内に限られている。このPGAチェックポイントにおいて、選択的な人とモノの移動の管理から、絶対的な人とモノの移動の管理へとシフトする。つまり川沿いで許されていた日常的なモノの移動に対して、初めてここで管理の目が入ることになる。以下は、実際に密輸米を公共バスでコタバルまで運ぼうとしたマレー行商女性の姿から考察を行う。

7-2. 国境空間を越えるタイ米の管理

バンダクチル発コタバル行き朝10過ぎのバスには、必ず移民局前のバス停からマ

レー女性行商人たちの姿がある。この日も、親子と見られる二人のマレー女性が大きな麻袋をいくつも並べてバスを待っていた⁶⁵⁾。ドリアン、ランブータン、バナナ、レモングラスなど南タイからの農産物を入れた麻袋、20袋以上がバス停前に置かれていた。コタバル行きバスの到着と共に、これらの麻袋が、次々とバスの荷台に投げ込まれる。この積荷作業を行うのはゴロックからこれらの果物を運んできたバイク便の2人の男性である。この作業が終わると行商人の女性は、男性たちに一人10リングットほど⁶⁶⁾を渡し、男性たちはバイクに乗ってタイ側へ帰っていく。一人の女性行商人は、タイ米が入っていると見られる黒いビニール袋をバス車内に持ち込み、座席の下にもぐりこませる。彼女たちは、バスの運転手に支払いを済ませると、席に戻り近くの乗客たちと世間話を始める。彼女たちの手には、国境警備隊(PGA)チェックポイントに備え、国境の税関での検査⁶⁷⁾を済ませたことを示す領収書が握られている。そうこうしている間に、バスは移民局から5キロほど離れた場所に設置されているPGAチェックポイントに到着する。オランアスリ部隊のオフィサー2人がバスに乗り込み、一人一人の身分確認を行う。このオランアスリ部隊は、2002年末からの配属であり、以前はマレー人部隊であった。マレー部隊では密輸を逃がしてしまうことが多く、よりチェックの厳しいオランアスリ部隊が送り込まれてきたという。オフィサーが一人一人のパスポートや身分証明書をチェックする間、下のバス荷台では荷物検査が行われている。そうこうしている間に、この女性行商人の麻袋から、20袋(1袋5キロほど)ものタ

65) これは実際に2003年8月24日に筆者が乗り合わせたコタバル行きバスで起きた出来事である。

66) こうしたバイク便は国境の両側に待機しており、一般的な運賃は、500メートルほどの距離で平均1リングット、もしくは10タイバーツである(2005年1月現在)。

67) AFTA(ASEAN Free Trade Area)のCommon Effective Preferential Tariff Schemeに基づき、2000年以降、アセアン内で産出された産物(特定の指定品は除く)のアセアン内における流通に関しては、課税率が5%以下となっている。尚、この行商女性の扱う果物の量は少量であり、課税対象外と見られる。

イ米が次々と発見され山積みされる。PGA チェックポイントに到着する前からこの女性行商人はすでにこの税関での領収書を用意していたように、基本的にこの女性行商人は、マレーシアに入国する際に税関でチェックを受けている。つまり彼女たちは一度、国境において税関という公的な場所を通過しているにもかかわらず、国境線ではこうしたタイ米は発見されていないのである。PGA チェックポイントでは税関で発見されなかった密輸品の押収が主に行われる。ここで発見されたタイ米は密輸取締ユニット (UPP)⁶⁸⁾ に引き渡され、そこで罰金を払うか、刑事責任を追究されることになる。こうしてこの女性行商人2人は、バスの座席の足元にもうひとつの密輸品である黒いビニールに包まれたタイ米を残したまま PGA チェックポイントのテントの中へ消えていった。

8. おわりに：インフォーマルな越境が日常化する空間のメカニズム

このようにインフォーマルな越境が日常化する国境空間について、バンダクチルにおける人・モノの越境のあり方を考察し、生活領域として機能する国境空間の形成において、いかに越境者側だけでなく管理者側が関わっているのかを明らかにすることを試みた。第一部の人の日常的越境においては、誰が日常的な越境者であるのかを明確にした上で、越境通学の事例から考察を行った。特に越境通学者の事例からは、タイ側に住みマレーシア国籍を持つ二重国籍者の姿が浮き彫りとなり、彼らの日常的越境においていかに法的地位の確保という前提条件となっていることが明らかになった。第二部においては、モノの日常的越境について、バンダクチルの経済活

動に焦点を当て考察を行った。特に国境地域内におけるタイ米の流通の姿からは、国境線上では管理が行われず、むしろ数キロ離れた国境警備隊のチェックポイントにおいて管理が行われているという、国境空間におけるインフォーマルなモノの管理のメカニズムが明らかとなった。

インフォーマルな越境が日常化される国境空間は、一見秩序が不在であり、国家管理そのものが弱いと認識されがちである。しかしながら本研究で明らかになったことは、むしろ越境者側と管理者側の間におけるある一定のルールを基盤にインフォーマルな日常的越境が行われているという点にある。このルールこそが、国境空間が生活領域として機能し、インフォーマルな日常的越境が可能となるための条件なのである。そのルールを再度整理しておく、

- インフォーマルな人やモノの移動において、管理側の移民局や税関が選別的管理を行っており、日常的越境者に対しては法的手続きが省略されること
- インフォーマルな人の移動においては、バンダクチル市民のほとんどがボーダーパスを確保し、またゴロックからの越境通学者や越境労働者が二重国籍者であるという事例に見られるように、日常的な越境者の法的地位があらかじめ確保される傾向にあるということ
- インフォーマルなモノの移動において、タイ米のように輸入規制が行われている商品に見られるように、国境空間内における消費、流通に関しては国家の管理が入らないものの、国境空間を越える動きに関しては、国境から離

68) 密輸管理局の正式名称は *Unit Pencegahan Penyeludupan* (UPP)。PGA は密輸者を拘束するが、その後 UPP へ通報し、密輸品と密輸者の引渡しを行う。そして UPP で罰金が課されるかもしくは場合によっては基礎される。尚、押収された米は、輸入モノポリ業者である Bernas へ売却され、売上金は政府の資金になるという。現在バンダクチルにおける UPP 職員は 25 名であり、パトロールは行わず、PGA の通報を基に押収を行うという (2003 年 9 月 7 日 UPP バンダクチル支部のオフィサーとのインタビューより)。

れた場所に設置された国境警備隊のチェックポイントにおいて取締りが行われるということ

このように、バンダクチルにおけるインフォーマルな日常的越境の事例から、国境社会が経験する領域境界について日常的視座から考察を行った。繰り返すようであるが、国境におけるインフォーマルな越境は国家管理の弱さを条件とするのではなくむしろ、越境者側と管理者側の一定の暗黙のルールを前提に機能しているという点であり、このルールのそが生活領域としての国境空間を形成する上で非常に重要であるということを今一度強調しておきたい。

最後に、現在のタイ・マレーシア国境東部の状況について触れておけば、筆者が主な調査を行った2003年から2004年1月までの政治的環境とはかなり異なっている。もともとタイ南部国境県（ナラティワート、ヤラー、パッタニ）はタイにおいて最もマレームスリム人口が集中している地域であり、1960年代以降、PULO（パタニ統一解放連盟 Pattani United Liberation Organization）を中心する独立分離運動の存在があった。1980年代末にはその動きもごく小規模なものとなり、ほとんどPULO組織は壊滅的であると認識されていた⁶⁹⁾。しかしながら最近になって再びその活動が活発化している。

特に2004年1月以降の南タイ側で起きている一連の殺傷、爆破事件は、2007年4月現在までにその死者は2,000名にのぼっており⁷⁰⁾、日常的な越境活動が重要な位置を占めるバンダクチルの人々の生活に直接影響するものである。サンパン貿易を行うある華商によれば、彼らの経済活動自体にはそれほど影響はなく、以前と同様にヤラーやパタニなどからの商人がハラル食品の買い付けに来るとい⁷¹⁾。むしろ心配なのは、彼らの店で働くゴロックからの労働者たちの越境のほうであるという。「いつまでこの状況が続くかわからないけど、タイのマレー人が一番今の混乱状態を嫌がっている。何よりも食べていくことのほうが重要だもの。」またバンダクチルで食堂を経営するある華人女性は、直接南タイ側の影響を受けていると言⁷²⁾。週末にバスツアーで訪れていたマレーシア国内の観光客の姿が2004年以降大幅に減少したという。以前であれば、毎週のようにジョホールバルやベナンから華人観光客によるクランタンのタイ仏教寺への参拝ツアー⁷³⁾があり、そのツアーの一環で、バンダクチル国境を見学し、パサーでお土産を購入するというというスケジュールが恒例であった。週末になるとこの華人女性の食堂には多いときには一日100名近い華人ツアー客が、名物のナシヤム（鶏飯）を食べにやってきたという。しかしながら、2004年1月以降の南タイ側にお

69) “Terrorism: Strife Down South” *Far Eastern Economic Review*. Jan 22, 2004.

70) 南タイにおける分離主義組織のテロ事件は、タイ国内において非常に深刻な社会問題となっている。2004年6月にパタニのクルセモスクで起きた政府軍と分離主義グループとの銃撃戦では30名以上の死者を出し、次いで2004年10月にタイ国境の町タクバイで発生した分離主義組織のリーダーの解放を求めるデモは、結果的に90名近い死者を出すことになり、ますますタイ政府と南タイムスリム社会における溝を深めている。従来の主要反政府組織であるPULO以外にも新しい組織が形成されていると言われ、中心組織の顔が見えないのが現状である。犠牲者の多くは警察や軍、それに教師などの公務員であり、多くがタイ仏教徒であるが、ムスリムの犠牲者もそれに含まれ、必ずしもムスリム対仏教徒という二項対立ではない。2006年9月のタクシン政権崩壊以後も、南タイ犠牲者の数は増えており、解決の見えない泥沼状態に陥っているといえる（“Thailand: Southern discomfort” *The Economist* Apr. 17, 2007: 40）。

71) 2004年9月5日のインタビュー。

72) 2004年9月4日のインタビュー。

73) このタイ仏教寺参りのツアーは、もともとクランタンのタイ仏教寺（ほとんどがトゥンパットに集中）で参拝するとロトくじが当たるとい⁷⁴⁾という評判からツアー客が増加したという。

いて多発する爆破事件などの報道によって、国境地域そのものが危険地域として認識されており、彼女の店を毎週のように訪れていたツアーの客足がぱたりと止まったという。この食堂の店主は「私は毎日のようにゴロックの市場に買出しに出かけているけど、ジョホールからの観光客にはこちらの状況は分からないのよね。バンダクチルはマレーシア側なんだから安全なのに。」と言う。南タイにおける殺傷事件は主にナラティワートのゴム農園などの農村部で起こっているが、ゴロックにおいても2004年以降、複数回爆破事件が発生しており、決して安全な状況にあるとは言えない。しかしながら、この華人女性にとって、毎日のゴロックへの買出しは、食堂を経営する上で非常に重要な日課であり、国境が閉鎖されない限り、欠かすことはないという。

南タイでの一連の反政府分離主義活動は、多くの犠牲者を出し、国境地域そのものが非常に不安定な情勢にある。しかしながら、上述のサンパン貿易の華商の店に勤めるゴロックからの労働者や食堂経営の華人女性の日常的な市場への買出しの様子からは、バンダクチルの住民の日常的越境はその後も継続されていることが分かる。むしろ彼らにとって深刻な問題は、経済活動を揺るがすような、国境イメージの悪化であり、国境警備の強化であるといえる。特にバンダクチルの経済はインフォーマルなモノの移動を基盤としている。国境警備が強化されることになれば、サンパン貿易のような川を介して行われる経済は最も影響を受けやすい⁷⁴⁾。このようにインフォーマルな人やモノの日常的越境を基盤と

する国境空間にとって、こうした政治的な変化は、直接彼らの日常に影響を及ぼす要素であり、まさに国境社会と国民国家の関係性の現実の一部であるとも言える。

参 考 資 料

- 綾部真雄 1998「国境と少数民族：タイ北部リス族における移住と国境認識」『東南アジア研究』35(4): 171-196.
- Baker, A.C. 1936. *Annual Report on the Social and Economic Progress of the People of Kelantan. Report for the Year 1935*. Bota Bharu, Al-asasiyah Press.
- Barth, Fredrik (ed.) 1969. *Ethnic Groups and Boundaries: The Social Organization of Culture Difference*. London: George Allen & Unwin.
- Coughlin, Richard. 1976. *Double Identity: The Chinese in Modern Thailand*. Hong Kong University Press.
- Dorairajoo, Saroja. 2002. "No Fish in the Sea: Thai Malay Tactics of Negotiation in a Time of Scarcity." Ph.D. dissertation, Harvard University.
- Evans, Grant, Christopher Hutton, & Kuah Khun Eng (eds.) 2000. *Where China meets Southeast Asia: Social & Cultural Change in the Border Regions*. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.
- Firth, Rosemary. 1966 (1943). *Housekeeping and Malay Peasants. Second Edition*. University of London, The Athlone Press.
- Fraser, Thomas. 1960. *Rusembolan: A Malay Fishing Village in Southern Thailand*. Ithaca: Cornell University Press.
- Immigration Act 1959/1963 (Act 155) & Regulations and orders & Passports Act 1966 (ACT150)*. Kuala Lumpur: International Law Book Services. 2001.
- 伊豫谷登士翁 2002『グローバリゼーションとは何か：液状化する世界を読み解く』平凡社新書
- 石川 昇 2000「空間の履歴：サラワク南西部国

74) 2005年9月の記事によれば、ゴロック川沿いの66箇所の不法な船着場のうち64箇所を閉鎖することをタイ政府が発表。これらの船着場はすべてタイ側にあり、タイ政府は爆破事件や殺傷事件の主犯となっている分離主義者たちの越境の動きを管理することを目的としているという("Thais closing illegal border jetties" *New Straits Times*. Sep 19, 2005)。しかしながら2006年6月に筆者がバンダクチル国境を訪れた際には、以前と変わらず川沿いにおける越境活動が行われており、実際に船着場の閉鎖は実行されていなかったことが分かった。尚、2005年1月に筆者が訪れた際には、バンダクチルの出入国事務所において、従来行われていなかった車両(バイクは除く)に対する荷物検査が厳しくなり、車両での越境時間が従来と比べて大幅に増加した。

- 境地域における国家領域の生成」『地域形成の論理』坪内良博編者 京都大学学術出版会
- 伊藤正子 2003 『エスニシティ〈創生〉と国民国家ベトナム：中越国境地域タイ族・ヌン族の近代』三元社
- Jabatan Perangkaan Malaysia. 2001. *Laporan Penyiasatan Migrasi* (Migration Survey Report).
- Jabatan Perangkaan Malaysia. 2001. *Taburan Penduduk Mengikut Kawasan Pihak Berkuasa Tempatan dan Mukim 2000* (Population distribution by local authority areas and mukims 2000).
- Johnson, Irvings. 2002. "Movement and Identity Construction Amongst Kelantan's Thai Community", Paper presented to the First Inter-Dialogue Conference on Southern Thailand: Experiencing Southern Thailand. Current Transformations from a People's Perspective, 13-15 June 2002, Prince of Songkla University.
- 柿崎一郎 2000 『タイ経済と鉄道 1835年～1935年』日本経済評論社
- Kershaw, Robert. 1973. "The Chinese in Kelantan, West Malaysia as Migrants of Political Integration to the Kelantan Thais" *Review of Southeast Asian Studies*. 3(3&4): 1-10.
- Kessler, Clive. 1978. *Islam and Politics in a Malay State: Kelantan 1838-1969*. Cornell University Press.
- Keyes, Charles F. (ed.) 1979. *Ethnic Adaptation and Identity: The Karen on the Thai Frontier with Burma*. Philadelphia: Institute for the Study of Human Issues.
- Kobkua Suwannathat-Pian. 1988. *Thai-Malay Relations, Traditional Intra-regional Relations from the Seventeenth to the Early Twentieth Centuries*. Singapore: Oxford University Press.
- Leach, Edmund E. 1979 (1954). *Political Systems of Highland Burma: A Study of Kachin Social Structure*. London: Athlone Press.
- Legislation in Kelantan in 1939, 1940. "An Agreement between the Government of the Malay states of Kelantan, Kedah, Perak and Perlis, and the Royal Thai Government, with respect to traffic across the boundary between the Malay States and Thailand." Kelantan: 423-427.
- Leete, Richard. 2004. "Kelantan's Human Development Progress and Challenges" United Nations Development Program. (www.undp.org.my/uploads/files/kelantanHumanDevelopment.pdf)
- Malaysian Citizenship Rules 1964*. Kuala Lumpur: International Law Book Services. 2001.
- Marks, Tom. 1997. *The British Acquisition of Siamese Malaya (1896-1909)*. Bangkok: White Lotus Press.
- 宮崎恒二 2004 「国際シンポジウム『領域のダイナミクス：東南アジアにおける国境地域の比較』『通信』110: 13-16.
- Mohd. Kamaruzaman A. Rahman. 1992. "Penasihat Inggeris: Pembaharuan Petadbiran Negeri Kelantan dan Pengukuhan Kuasa (1910-1920)" *Warisan Kelantan* XI: 56-89. Perbadanan Muzium Negeri Kelantan.
- Muir, Richard. 1975. *Modern Political Geography*. New York: Mucmillan.
- National Statistical Office, Thailand. 2002. *Key Statistics of Thailand 2002*.
- National Statistical Office, Thailand. 2004. *Statistical Year Book of Thailand 2004*.
- Nimitchai Snitbhan. 2004. "Study on Cross-Border Transport of Goods by Road from Malaysia to Thailand" *TDR Quarterly Review*.
- Nishii, Ryoko. 2002. "Social Memory as it Emerges: A Consideration of the Death of a Young Convert on the West Coast in Southern Thailand". *Cultural Crisis and Social Memory*. (Tanabe and Keyes eds.), *Modernity and Identity in Thailand and Laos*. London: Routledge Curzon.
- Tagliacozzo, Eric. 2005. "Tropical Spaces, Frozen Frontiers: The Evolution of Border-Enforcement in Nineteenth-century Insular Southeast Asia." *Locating Southeast Asia: Geographies of Knowledge and Politics of Space*. Singapore: Singapore University Press.
- Takamura, Kazue. 2004. "Not 'Divided Places', But 'A Living Space': Chinese Women on the Thai-Malaysian Border." *Journal of Asian and African Studies*, 68: 173-191.
- Tambiah, Stanley Jeyaraja. 1976. *World Conqueror and World Renouncer; A study of Buddhism and polity in Thailand against a historical background*. Cambridge University Press.
- Tan, Chee Beng. 1982. "Peranakan Chinese in Northeast Kelantan with Special reference to Chinese Religion." *Journal of the Malaysian Branch of Royal Asiatic Society*, 55(1): 26-52.
- Teo, Kok Seong. 2003. *The Peranakan Chinese of Kelantan. A Study of the Culture, Language and Communication of an Assimilated Group in Malaysia*. London: ASEAN Academic Press.
- Thongchai Winichakul. 1994. *Siam Mapped: A History of the Geo-Body of a Nation*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- 床呂郁哉 1999 『越境：スール海域世界から』岩

波書店

- Tsubouchi, Yoshihiro. 2001. *One Malay Village: A thirty-Year Community Study*. Kyoto Area Studies on Asia: Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University.
- Tsuneda, Michiko. 2006. "Gendered Crossings: Gender and Migration in Muslim Communities in Thailand's Southern Border Region." *Kyoto Review of Southeast Asia* (www.kyotoreviewsea.org/Tsuneda_final1.htm)
- UNHCR. 1980. *International Convention on the Protection of the Rights of All Migrant Workers and Members of Their Families, 1980* (www.unhcr.ch/html)
- Van Schendel, Willem. 2005. "One Space of Engagement: How Borderlands, Illegal Flows, and Territorial States Interlock." *Illicit Flows and Criminal Things: States, Borders, and the Other side of Globalization*. (Van Schendel, Willem and Itty Abraham eds.) Bloomington: Indiana University Press.
- Walker Andrew. 1999. *The Legend of the Golden Boat: Regulation, Trade and Traders in the Borderlands of Laos, Thailand, China and Burma*. Richmond, Surrey: Curzon Press.
- 王 柳蘭 2004 「国境を越える「雲南人」：北タイにおける移動と定着にみられる集団の生成過程」『アジア・アフリカ言語文化研究』67: 211-262.
- Winzeler, Robert. 1985. *Ethnic Relations in Kelantan, A Study of the Chinese and Thai as Ethnic Minorities in a Malay State*. Kuala Lumpur: Oxford University Press.
- Wyatt, David. 1982. *Thailand: A Short History*. Bangkok: Silkworm books.
- Yusoff, Ismail Mohamed. 1993. *Buddhism and Ethnicity: Social Organization of a Buddhist Temple in Kelantan*. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.

●新聞・雑誌●

Asian Economic News
Far Eastern Economic Review
New Straits Times
The Economist
The Straits Times
Utusan Malaysia

原稿受理日—2007年4月14日

掲載決定日—2007年7月25日